

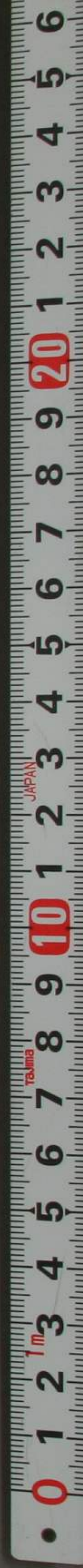


関ヶ原軍記

初編五

六

遠13
2207
3



門八遠13
 瑞2207
 卷 3

牛本
 池清

関ヶ原軍記初篇卷之五

目錄

- 一 小西行長 藤堂氏知事
- 一 復頼 知事
- 一 并加藤清正朝解小大常次頭知事
- 一 日本勢強 朝解小大常次頭知事
- 一 并大明勢 日本勢と追強知事

書の初編
 新編 武蔵野書院

古之長城品也 或れも水鏡、陸奥、公史
 並世輝垂書 麟
 國 奇 和 戰 誓 此
 蘭 軍 軍 華 此 書 本
 對 軍 軍 軍 此 書 本
 辨 其 氏 將 軍 書 其 氏 將 軍 書 其 氏 將 軍 書
 其 氏 將 軍 書 其 氏 將 軍 書 其 氏 將 軍 書

牛本
池清



園ヶ原軍記初編卷之五

小物ちぎら川長藤堂ふじどうの為ため知し平へい依よく

粮いね想おもはる事

并な加か度ど清せい正せい朝あさ解げ必かならずく大おほ骨ほねとと取とる事

去い河からら小こ及およ堂どう依よ海かい者ものをを虎こを

朝あさ解げ必かならずく山やま海かいにに总すべ陣ぢんして

法はふ乃のちはは使つか者もの取とりてて日本にっぽん大おほ園の極ごく

由他界なりしころの地なり
あつては終がざらやりに帰れ
終るまありと

家康公より此御下知ありと
つゝこれと申すは小細川長
大さき終が初終して急ぎ
新塞は終津が陣は川大さき
終息して今この軍名改訂

ふつ時々大明賢略とあり
必定進討は是よりありし時
を是より指するは是也且今
郭安由と欺してわがくは
しつゝ色も事ありと
一時もはやく攻めたりし物
ありと終がさうありし物
と走りまわり思田長政二人

頼りの中後(たご)も清(きよ)美(み)弘(ひろ)の(その)班(ばん)
お及び(およ)び(び)ら(ら)車(くるま)あり(あり)志(こころ)づ(づ)り(り)り(り)
会(あ)い(い)と(と)出(い)で(で)て(て)船(ふね)ゆ(ゆ)ひ(ひ)し(し)し(し)く(く)
引(ひ)退(ひ)き(き)ぞ(ぞ)く(く)べ(べ)し(し)一(ひと)歩(ふ)の(の)近(ちか)ざ(ざ)り(り)
大(おほ)き(き)き(き)り(り)執(と)り(り)ゆ(ゆ)く(く)持(も)ち(ち)利(り)
これ(これ)を(を)根(ね)づ(づ)り(り)よ(よ)追(お)い(い)つ(つ)る(る)り(り)き(き)
る(る)名(な)ど(ど)ま(ま)り(り)り(り)百(ひゃく)一(いち)款(くわん)を(を)結(むす)ぶ(ぶ)
あ(あ)ら(ら)ば(ば)加(か)後(ご)清(きよ)正(ただ)の(の)自(みづか)づ(づ)ん(ん)よ(よ)執(と)り(り)

ま(ま)あ(あ)り(り)そ(そ)う(う)色(いろ)も(も)黒(くろ)田(でん)長(なが)政(せい)と(と)加(か)
後(ご)前(ぜん)明(めい)と(と)秋(あき)赤(あか)の(の)一(いち)手(て)に(に)ぬ(ぬ)り(り)く(く)
く(く)く(く)く(く)ひ(ひ)と(と)意(い)ま(ま)べ(べ)き(き)る(る)り(り)今(いま)俄(わか)り(り)
り(り)和(わ)ら(ら)く(く)致(いた)さん(さん)と(と)七(しち)は(は)都(みやこ)の(の)
て(て)名(な)お(お)と(と)と(と)奉(ほう)ぐ(ぐ)べ(べ)し(し)と(と)返(かへ)答(こた)え(え)
ま(ま)ら(ら)う(う)く(く)ら(ら)お(お)れ(れ)ん(ん)く(く)
も(も)清(きよ)美(み)弘(ひろ)の(の)中(なか)さ(さ)ら(ら)く(く)と(と)り(り)
今(いま)和(わ)睦(ぼく)好(こう)も(も)バ(バ)款(くわん)不(ふ)審(しん)也(や)也(や)

とつりて小細きいり
身被りは音よ走り出り
有子の務初と大色群鄭安
推帯して叔も日本に
せしるゝんとて日本乃
り引退ぞうんとすら
の惣大將平告り
大明は大军を松平
引退ぞうんとすら
とすら

やうく拾万人の
如李と大將と次漢南
深と松平清正と封陣
と名士の透とら時
大明勢子のせり
討せんといひ
割して近頃
そあへあつ

が御ごとまをと見みばや多おほし門
久くも九く死し一生いつせいに殺ころしひはま
まるありまま清きよ正ただと号ごう維い忠ちゆうの
追おつぎやままささあありりの糧たかり
よ追お討うち時ときわわななららばば愛あい小
小こ物ものをを討うち果はるるべべききありりそそて
軍いくさをを額あたまりりありり在あるる清きよ隆たか王おう
河かわ津つ本もとの軍いくさ勢いきほたたのの門かどありり

ババそのそのややににささるるべべききありり
川かわ長なががが鴨鴨ととよりより新あらたまましてして沖なみ中ちゆう
よ出いるる時とき討うちちええべべきき先ま遣はららるる
軍いくさをを配くわるるゆゆにに小こ物ものをを人ひとのの難がた
候さむらひととぬぬりりりり愛あいおお後ご全ぜん討うちち
頭かぶをを部ぶのの事こととといい知しららせせてて
厨く山さんにに居ゐるるふふ後ご堂どうがが仗しやう席せき
の告つげげ来きるる時とき清きよ正ただとと清きよ那な王おう河かわ

と會合して中々るの太陰市地
界のうへきそ飛よ及をぶらる
仕合せ好りこのうへ
博川度り沸下知れどくあり
今年と引取るより和のあり
志うれ若大唯函の大將吳惟忠
る今十数万騎を備へあり是
なるもくこれの好く心良將

よして退きくと見らるるはそ飛
ふ大軍を退強ん又隠れんと
まれど好るの備へよあり
え来れ解と死よとあり
まのありら車るれば七ヶ年在
陣して今年に引取ると日お
れ急おありよしけるの
急ぶるるは急ぐ次あり

漢南此是惟忠が陣中へ送る
去ぬら八月地界干しよん
日本勢大きふちうと病
より是より近く軍勢は引
たるれば清正一人この地へ止
ちうぐさうあ〜んぶりの虚へ乗

大明勢七ヶ年
此在陣も今般利運城は
居るありいそ紀退強く鉄
城交せしきんや呉附忠が軍
此は返善干候〜一戦は
と鉄と送り又前へ物軍
の大將李如李より此送り
夜光の玉二つ送りら程は上

これより唐よりその大寶より承る
徳れは清正の徳よりよあはれん
李如松は送り送るもあはれん
頼る入るより一きり一きり
より一きり呉惟忠大さき年うんと
さして一きり大寶ある清正より
け鹿より一きり一きり一きり
神より一きり一きり一きり一きり

穴を掘りて隠すべし
そのより一きり一きり一きり
ありと感してその返るあり
清正と敵あがも英勇あり
より一きり一きり一きり一きり
より一きり一きり一きり一きり
より一きり一きり一きり一きり
より一きり一きり一きり一きり

とも 隆く 運び 厨山 ともを ん
 く とも と 勝り 押 出 次 天 晴
 多 奴 の 良 好 あり

日 中 勢 勢 勢 勢 勢 勢 勢 勢 勢
 并 大 明 勢 日 中 勢 勢 勢 勢 勢 勢

曰く 日 中 勢 相 解 西 へ 引 退 せ ぐ
 と ころ あり 小 西 行 去 ぐ 軍 あり 去

被 令 浦 へ 押 佐 佐 佐 佐 佐 佐
 及 ぶ の 時 相 佐 佐 佐 佐 佐 佐
 小 物 の 軍 あり 去 ぐ 勢 あり 去 ぐ
 肥 前 名 護 屋 へ 引 清 正 三 成
 卒 備 へ 押 へ び 押 へ び 押 へ び
 して 休 息 せ ば 却 へ 天 下 へ 勢
 しく 静 しく して 依 尼 しく 執 年

徳大名は秀頼は
年姪の婿有り以後太閤の遺言
より秀頼は秀頼大坂に入陣
家康公も同く大坂に戦ふ
この時を御信の人殺し
所相市正より
石田が密謀より信より
大坂と成り安否より
少弐長束

等ふ力して軍討つ
を死用なきなり
家康公は信より御信のせり
追人をとけく多むらり
井原を部少輔を政清
来りて御急難より
徳人出陣を感より
家康公は信より

還御ありあり

云々々々曰く香道乃具也
して思故々々々々
平生とも士と極め事
却文ありこんまもそ
多とゆりかこえあり大工
あふあやどの名ん
東一曲尺磬 箏 篳篥 杖 太鼓

此及々々々々々
くくくくくくくくくく
むその道平 是思あり
切きぶら 箏 杖 篳篥 杖
くくくくくくくくくく
てい一日つひ
むるり 刺り おもそれ部
のどくくくくくくくくくく

そのもろが道具と用を
まき車あり実物も徳
も是りとの時やう及多と
吹味して能き時を定哉
有り或ひのそぎりりく
引切ら時を即時と切明之
急角と大將たる人の部
のどろ馬かひつりこれ

軍法能き士に道具あり其
切ら時を切きざら及多の
おとろ又まうくれく何あ
鞆ひも徳畧も故えり
ら能上とれ士とをその
それの役目あつた
時の能られども悪く
ろろろろ橋の扉を

雲泥の邊板として梁の本
れ曲りくら城床を
用ゆるがごとく
の武士城勘定路
土地の案内者として
下役れものなり
石をけしとす
引原おある是の元來忠良

の人をまよせざらば
却ののどく
よて物を書く先
政より又の田畑
も農具をととのく
とるをせむ業程を
高人福分よ
ねのらぐ月これ持し

わくお伽くくく句端くろえ

あり安ん

東照宮を神霊不思淑以運

命彦太して又四智深え

腕を所り彼書通のごとく

能身道具と持あり水泉

の井伴 本多 柳原の

三好ありくち真のそあ

はくちやあして文武の候か

士より候くわあ勝危き

と道れ玉の早免孤立こり

しての切立廻りあり

行くくああでお誓ちか

ざら時の金く所利運の

候ありくぼとああ

これああ善徳と同日

去程小船解西にお孫の軍
乞臨津替も急ぎ福臨池田
此めんくまの所唐一の
沖へ出ぬと後孫より中
送らるるや金山海を後
く桑あも小孫が去の臨津
千同傳せんといふやん号傳の

軍にお孫の軍一萬二千余人
小孫が軍の七千余人その外
生捕おと引つれ早く水
楫え等走りたりと出船
大明船解の物見の急ぎ兼
て清正とて追強よりたとぐん
りりまの臨津 急回 津池
田福臨おの退バの急ぎ

於^ま到^ぎと^り之^の在^る品^を今^も小^の物^を多^く蓄^む
津^つと連^れ立^た引^のの^きき^りと告^る
小^の依^りく^物物^をお^お却^く叙^す李^り如^く李^りと^り
急^き子^を浦^をく^れと^や船^をり^福福^を流^す
き^きに^に海^の上^の乃^の汝^の合^をく^く
此^の口^とと^ちり^り小^の物^をと^討討^めり^の
事^を有^る船^を手^に此^の先^師先^師元^の的^を百^を余^を
人^をあ^らび^びり^先先^師文^を臨^をお^軍軍^を

陸^を隣^を等^を中^を軍^を此^の大^をお^く
寺^を万^を余^を人^を急^をく^船船^をと^發發^す
追^を討^をんと漕^を切^をり^のの^せり
馬^を田^を淺^を野^を池^を田^を福^を勝^を等^をと
と^や海^を口^をと^とる^れく^幸幸^を波^をの
沖^をに^急急^をる^時時^津津^をる^小小^の物^を
同^を船^をく^津津^を口^を越^を衣^を手^をく^足足^をく
志^を所^をく^小小^の漕^を出^をる^時時^津津^をが

去々年^ね東海^{ふい}の者^{もの}とて
海^{うみ}の列^{れん}より来る
楫^{えい}夫^{おと}も子^こを中^{ちゆう}へ
人^{ひと}をうりまゝに
楫^{えい}帆^{はん}をてつて
うた^{うた}及^{およ}其^{その}ゆ
と帆^{はん}より漕^{そう}扱^{あつ}
津^つがゆのちや沖^{おほ}中^{ちゆう}一^{いつ}押^{おし}

出^いまらるる
ゆの船^{ふね}のそり
碓^{うす}津^つを同^{どう}勢^{せい}に
去^こ部^ぶ形^{かた}細^こ武^ぶ彦^{ひこ}の妻^{つま}人^{ひと}
後^{あと}殿^{でん}のゆの
のそり又^{また}惣^{そう}軍^{ぐん}に
して碓^{うす}津^つ中^{ちゆう}勢^{せい}を捕^{とら}は
船^{ふね}の船^{ふね}より風^{かぜ}を走^はり

押来る叔躬解の船手は大将
え的を弓矢功志して少弐
川長を討ち去る年来の舟
懐を達せんと碇津も少弐
ともいふを追討して
是近の吳西の船を清りよと
下知するゆゑに船手は大将
郭子純が船一艘その船實

少弐二百餘艘軍を去り千人
一時に少弐の同勢を追討して

池清

関ヶ原軍記初篇巻の八終

池清

油清

園ヶ原軍記初編卷之六

目録

一 小西ヶ原勢難戦危急の事

并加藤清正 小西勢と救つて名古

屋は着陣の事

一 朝鮮大明とも清正乃不業感几度

并加藤清正 石田三成平論の事

油漬

同ヶ原軍記初篇卷之六

小納が同野えん越我き危急きの事

并加及清正きん小西野せと殺ころつて

名古屋な一着陣ちやの事

去程き朝あ解か元約げん大明たいの郭かく

子こ龍りゆう小西せ野の同野どうと同どう

かけち被ひと明あ〜〜〜
解か岐ぎの

しんをとりおろしと申すと射を
川長が年々と遊みと申す
射の矢をぬの降とくあり
郭子純の矢を随一の申す此
名人なるれむこの矢を記し射
とてらんく小駒が軍を
船中此申す不案内あり以
ての舟は深し湖の舟を

小駒のいづれがく申す皆殺し
しんをとりおろしと申すと射を
川長が年々と遊みと申す
射の矢をぬの降とくあり
郭子純の矢を随一の申す此
名人なるれむこの矢を記し射
とてらんく小駒が軍を
船中此申す不案内あり以
ての舟は深し湖の舟を

城亦折しりぞたり其時そのときのふり
まじりくともりて大勢おほし也合あは
ふらふとるなりなりのたししららなり
あふとるなりなり既すでにになり
らんらんととりりなりなり郭かく子し竟けいの
軍いくさにに周しゅう章しょう狼ろう想しょうなりなり冥めい舟しゅう小せう
なるなるなりなり海うみはは一いつ行い志しなりなりぞく
その時そのときありありとと溺おぼるる者もの多おほししけ

勢いきまなりなりひひりり乗のりくく鴻こう津しんがが軍いくさ兵へい
大おほ勢いきま無なとと揚あ帆ふなりなり帆ふ成なり
ししくく大おほ將しょう義ぎ弘こうがが子しにに追お急いそ
たりたり小せう孤こなるなるのの扉ひらなりなり
遊あそぶぶなりなり鴻こう津しんががええ船ふねをを目め南みなみ
なりなり舟ふねとと走はせせたりたり遊あそぶぶ
船ふねもも船ふね具ぐ揚あ帆ふなりなり舟ふねのの名なのの振しん
ししるるなりなり李り統とう淵えんのの軍いくさ文ぶん千せん

余人初より大づきりして追ひ
来るも急今いのがれ馳く行長
も討死せむさるるありこの
時行長が志匠塚志在傳の
木戸代友兼の 小細重盛物等
をみみ来りて小西が頼ふ手に
むすひひらき死に長そ小細
を捕りて志匠にたすむと

大おろしびり流るお城のこ
らん先立せしてせし小細
が中赤の頼馬守と立て
親身く又百余人を奪て押
しつけし勝りて一りくさ
しと揮ちと名く鼓金浦
り争身より大明朝解の
軍をたらしむりや小細を遣れ

難く名ひく一所一集
そや追討せしむる一万余人
鯨波の急戦揚る押舟
より小西が軍会た討死と定
められばかりも押舟あり
去れぬ敵を目ふ余ら大軍故
急も攻立候しとあるが
殺しませしむるも多しあり

此時声振る右軍の
情の小西自度助等も皆く
寢るの者去りして逃
走ざる所と小西が長が
と押して戦ふんとす
あつりけ付か度自討及ち遠く小
沖のうすれ破走と見きりけ
まを小西がとて戦ひ

あまごもいりてくく焼拂ヤキス
りてく只今も討てるま体てい
なり清正の時居たきあるあ
くまふり誰人もせよ日本
の軍令也この物と捨あうば
攻教さうべ——日本攻船の節
味方と捨教——ふせ——と笑
りてるん是もはと——と急きう

千船を漕急よ助くべ——と
いふ時千船人等疎あけるま
是も沖とさう順風あうり
このうせ決くわつも身くうれまきと
まら肉千風舞りるば大ひま
難なん決けつすべ——捨すてるま一と
いふまど清正大まき千怒り不痛ふつう
まらる事とやりのうれ美あ

よ入く一夜も不^ふ差^さ越^こえ^ぬん七
年^{ねん}望^{ぼう}志^しよ在^{ざい}陣^{じん}は^らい^で我^{われ}
千^{せん}續^{つづ}け^りと妻^{かよ}船^{ふね}百^{ひゃく}余^よ艘^{そう}小^{せう}船^{せん}
よして脚^{あし}事^{こと}ぶ^らし^と船^{ふね}よつ^つけ
波^{なみ}を^を押^お切^きり^て報^こ重^{えん}浦^{うら}漕^こつ^事
船^{ふね}毎^{ごと}り^に和^わ度^ど十^{じゅう}三^{さん}石^{しやく}と^と重^{えん}さ^ら
小^{せう}籠^{かご}決^{けつ}さ^ら一^{いつ}毛^{もう}毛^け此^{こゝ}周^{しゅう}府^ふ決^{けつ}上^{じやう}
千^{せん}身^みて^て走^はり^しと^と是^{こゝ}西^{せい}の^の船^{ふね}

たより^{たより}是^{こゝ}と^と見^みく^く差^さ越^こえ^ぬ清^{せい}正^{せい}乃^の
武^ぶ常^{じやう}を^を知^ちり^しと^とり^しの^の人^{ひと}
和^わ度^どが^が今^{いま}この^{この}退^{たい}は^は必^{かならず}し^きに^に
と^とり^しと^と下^{した}知^ちあり
一^{いつ}存^{ぞん}出^{しゅつ}合^{ごう}の^の人^{ひと}も^も一^{いつ}と^と肉^{にく}
よ^よし^しの^の漕^こを^をせ^せく^く彼^あ軍^{ぐん}名^なと
さ^さら^らと^とね^ねく^く小^{せう}西^{せい}が^が名^な士^し名^なと
大^{だい}き^きに^に慌^{あわ}ら^らび^びて^てい^いく^くむ^むら^ら

清正を彼に百余人の軍を
遣はし舟に乘せしむ
沖のりて出せしむ吳西の私
を感心して天晴和漢の良將
なりとて是を感心して清
正を慕はしめて私をたんと
くく門拂ひくを彼の國

孫布干つま一あり返りて
休息しそんより名古屋
总陣を南をん希有良將
少和漢を乞と稱たり

朝拜大明の將士皆清正の事業感ん
并加度清正石田三成幸論の事

斯多大明の惣大将李如松朝

解の元帥越えしめ徳が悉く
日本勢は退散を恨みびらけり
厚くそ金山浦より朝鮮あり
青兵を至ておさる漢南の是
惟忠も蔚山の清正の居城に
入らに本丸二三の丸その外
堀櫓運木ありびり狭留
死におやで丈夫にして実や

南城強りしもことわりあり
後平本城清正の居所と見え
て金屏風城引おして金櫓
の警備も同じ水引流道あり
其形様も此宝物輝き輝く
目越おどろく候をりあり
清正自筆の文書は遺書
ありそのおもしろい今に及ん

とことく朝鮮を三所去
て対乱婚事ある急状あり
今日日本手奪山川べま
りてこの六七年急劫して
朝鮮必才大さすつるべま
あり都る金銀の道多るり
わく用えるる備りさるり
今又焼捨るも急をさるり

そのやうにゆらひらきんが為
干渉し對りのやうり又殺あが
手に生捕るる人殺るんそ八百
人余るりそ邦日本へ返つれ
け生捕りのたの急合二子人
手おらぶ此れは帰朝以後は
内大臣へり
免しとけくみさるる

しり父子兄弟此對めんさせ
居るありし是れ朝鮮人我日本に
意ぜざられしありあるに於ては
遠正必し心再び波海し
討てむとせしありと去の
りし兵惟たありし日本大明の
徳軍勢朝鮮の志とて大い
うんとして是れ遠正の心を
なす

忘却せしむるを今も
の武徳とありし日本は
朝鮮大明も陣と見
る掃除ありしとて
美ふる遠くありし
日の本は風俗ありしとて

いひあへり所く是の百曆
亦八年十一月報解しつて安
堵して大晴の必懸越いさま
獲生しつて心地しつて既
そのともも甚だ荆菴 李如松
の大民しつて又金山浦年の
え的念と此しつていさま
とつちをとおる同く亦九年

大晴あつて
荆菴を六年に軍功の責と
して司る官に封せしむ是
依る父子おあんでる友也
朝鮮の小王隠居者多く日の本
より帰るしつて順和君臣位
る者日本に恩をまらさる
この日後
内府公卿下知

あつた六年以来生捕あり
うら美必人どもとくく
送り物さんる色バ朝鮮必より
も日本の生捕とゆさん隣必
の交りり永く相互ひくや
互をべりそとえ来唯和君一
交日本へ生捕する人ち助事
返さきししは李氏おぞく

してあるうら美永く日本は
終りくは拜礼と定めてちり
日本より先宗討る者交りり
くこの後をつむ故太閤秀
吉公の大業し始りか度清正
が武勇より今よりあつて
朝鮮必の日本と意どらん又
我國の大功なり実や清正が

七ヶ年此在陣まゐりて是必いの人
名なもももりあり部ぶく
日本の徳大名跡しに托たくあはれ
國名古屋こゑりて時ときに漢かん野の
去政石田三成いしだ せいせいの友人徳將とくしやうと
對面たいめんして太閤たいがわの遺いれ頼賢たのけん
成なりりてのづねに頼のたの感かん
涙なみだをぞ流ながされりる叔おじのちち小

三成せいせい中の各おの々おの久く々く此在陣まゐり
右みぎへなる中ちゆうにううて三年さんねんの事こと
も朝鮮せんしんへ居いる中ちゆうにいいて空野屋くうのゑ
仕しりたりああののも伏見ふしへ
より故太閤たいがわの弟あに原はら忠ただ成なり
と明年あしたねんも酒宴しゆゑん茶ちやの湯ゆに合あひ
午日ごにちを告つぐりて中ちゆうにいいて
流ながるに清正せいせいをを導みちして石田いしだとを

不和ありこれの朝鮮とて倭
最負をとりしとて石田を屯
麓に好きて奈り強く古園乃
於威を借て威を那り次あり
清正を正直して武勇一へん
の人ありされば清正大善なり
石田及も此樂しみの内海島
たこそ何れもあはる之福ん

在陣の良き法おより諸將
えて後分那しんを今又
秀頼々此の諸あるの重銀自
那り上洛日後も定めて花
放るべしこの清正と七年此
在陣し手あ大さなり國窮
しんばねのくを拓清しん
も釋天木城食意しんより

邦ありし御初年此秀頼公の治
代也の難き事ありしを弓矢
此よりあがけよと申す
此の御代に御事ありしに
まじりしと云ふ事ありしに
石田三成と申す事ありしに
の福分ありし事ありしに
是れは御代に御事ありしに

申す依和山と申す三拾万石の領
事ありしに徳士の御代に
清正殿と申す事ありしに
被さるる事ありしに
此の御代に御事ありしに
正重と申す事ありしに
此の御代に御事ありしに
と申す事ありしに

の波も浦に何きものうびしは
いし天下安んじたりと云ふ
今年此あつて依怙是負の奸曲
成急度紀明中もさるりして
依見へしつれり所時依見して
る朝鮮の軍責もるに時津
義弘が新塞に執るひの和漢
名を養ひしつれりして日向の

國に七万石の加増あり又和度
清正も北増ありぬるに拾万石
の加増有り都合又拾万石にぬる
都く徳将千石の加増ありて
あつて七ヶ年在陣しぬる
辛勞と凌ぎたり依見物の丸
千の
天下に政するに
家康公の
の袖

の下に出る。所感光元天皇
高く志す中に治御年此治
時より弓矢の内幸勞有く
可く大敵千の有りし
信長公の良全身と誇りあり
秀吉の内随所有く大志此一
と取り玉ひ久しく玉那
祈りて武勇と磨身とあり

内願必すも官八別官位も二位の
内大臣内年にもや六十歳に
らせしむる被とひ是とひ
何く不足の多きや結し
く内忠意誠ありし
和漢も秀下とる学才の君
るればありともなきありま
内事明かしくせん

付^つく^る御^{おん}威^い光^{こう}りあ^らは^はに
年^{とし}曆^{りき}を^をつ^つく^くふ^ふあ^あら^らの^の
お^おく^くあ^あり^りあ^あら^らく^く結^{むす}大^{だい}名^なを^を
人^{ひと}も^も意^いせ^せざ^ざら^らい^いあ^あく^く 御^{おん}下^げ知^ち
城^{あき}お^おち^ちら^らに^にあ^あら^らつ^つて^て秀^{ひで}頼^{より}の^の近^{きん}侍^し
等^らこ^この^の内^{うち}に^にあ^あら^らは^はす^すく^く
始^{はじ}終^{はつ}す^す 徳^{とく}川^{がわ}屋^や 秀^{ひで}頼^{より}の^の
北^{きた}下^げと^と奈^な葉^はの^の操^{すま}あ^あら^らん^んる^る

必^{ひつ}定^{てい}之^の今^{いま}此^{こゝ}内^{うち}に^にあ^あら^らは^はす^す威^い光^{こう}城^{あき}く^く
ト^とう^うん^んと^とそ^そ内^{うち}心^{こゝろ}に^にあ^あら^らは^はす^す一^{ひと}様^{さま}み^み
々^々れ^れあ^あら^らは^はす^す人^{ひと}彼^{かれ}是^{こゝ}と^とす^すら^ら人^{ひと}
も^もあ^あら^らは^はす^すあ^あら^らの^の石^{いし}田^{でん}三^{さん}
城^{あき}ま^ま人^{ひと}を^をよ^よめ^めあ^あて^て時^{とき}節^{せつ}を^を
お^お伺^{うかが}ぐ^ぐひ^ひら^らり^り初^{はつ}め^めく^く交^ま交^まを^を三^{さん}
年^{とし}も^も改^かめ^めあ^あら^らひ^ひて^て四^よ年^{ねん}此^{こゝ}正月^{げつ}
元^か日^{にち}よ^よあ^あら^らは^はす^す秀^{ひで}頼^{より}の^の威^い

光もさく年始の由聖と清
ありて利家抱身とせしむ
三城内と刀越あり且元と由守り
とそちとそ和の徳士結持居候
とそく
家康公実初年
年礼と作上らるるは清野
長政披巻もそ次とそ又巻又
そ次とそ中巻と追とそ下候

徳將殘は清野礼中とそ実也
南年の目出とそ春年とそ立降り
徳人万葉歌徳とそは長秀頼
大坂の城は福り清の巻記との
妙持額りあり

油清

関ヶ原軍記初篇巻の六終 油清



